

「葬送という文化」の特集にあたって

編集部

激動の清末時代を生きた思想家・康有為の『大同書』に取められた「己部 去家界为天民」は、「第一章 総論」から説き起こされ、「第二章 人本院」「第三章 育嬰院」「第四章 小学院」「第五章 中学院」「第六章 大学院」「第七章 恤貧院」「第八章 医疾院」「第九章 養老院」と続く。この世である「家界」を去って「天民」、つまり悩みも苦しみも貧しさも憎しみも諍いもなく、豊穰で誰もが助け合い和む理想の世界に生きる天民となるために、どのような仕組みの社会を築き、どのような人生を歩むべきか。康有為ならではの「中国の夢」が語られている。

「第九章 養老院」までは納得できるのだが、最終の「第十章 考終院」に至って些かなりとも頭を捻ってしまふ。なぜ康有為は自らが理想郷として構想したのであろう大同世界に、人の死に関わる一項、いわば死者をどのように弔い、亡骸をどのように処理するかという項目を書き加えたのか。そこからは、清末保皇派の指導者として『孔子改制考』を掲げて頑迷な保守派と戦い、復古的革新主義者と

もいえる章太炎と舌鋒鋭く渡り合った姿は想像すらできそうにない。

だが、考えてみると、人口大国である中国なら、多くの亡骸を如何に葬るかは、一面では淡々と処理しなければならぬ現実的な難題でもあろう。生者は必ず亡びるわけだから。であればこそ康有為は、このような問題に深い関心を示したに違いない。

「第十章 考終院」の冒頭で、康有為は「一、凡人死、不論老少、貴賤、有疾、無疾、在私家、在公家、報考終院、或裹以帛、或盛以棺、立移于此院」と記す。人が死んだら、年齢、性別、貴賤、死因、死んだ場所、死者の立場に関係なく、考終院に報告し、帛で裹み、あるいは棺に納めて、直ちに考終院に移送せよ、ということになる。まさに康有為は死者を一括管理する弔いのための公的機関としての考終院を位置づけた。一般的には葬送は家族ではなく地域の共同体が執り行ってきたと理解するが、康有為は葬送と地域の共同体とを切り離そうとする。さて、大同世界

には地域の共同体などは不要ということか。

亡骸は内といわず外といわず香華が焚かれる考終院に安置され、縁者によって厚く弔われる。葬送儀礼に関し調度・備品から期間に至るまで、死者生前の功績・社会的地位・年齢・学歴などによって細かく分けられているが、亡骸の処理については土葬、火葬、鳥葬などを挙げた後、「千数百年行大同之時、機器日精、電化更奇、必有電化新機器、鼓動風転、傾刻足以形骸骨肉于無有者、上復帰于虚無、下散入于山谷」と記している。千数百年が過ぎて大同世界に至れば必ずやハイテク機器が発明され、「鼓動風転」というから瞬時にして「形骸骨肉」は消え去り、魂は虚無の世界に還り、遺された灰は山野に撒かれてしまう、ということだろう。

康有為の描く大同世界では、弔いの形には大いにこだわることが、亡骸は機械的に処理されることになる。それでも「大功徳」のある者に限っては、その亡骸を薬品で保存し、天下に範として示すと綴られているところから判断するならば、永久保存処理された亡骸に教育的機能を持たせようとしているようだ。

かくて「第十章 考終院」は、死者生前の事績と遺産は、凡てを考終院に記録する。遺産は原則として遺産官が管理する公共財となり、事績は詳細に検討され功徳があると認められた場合は、史館に送って後世に伝える——で結

ばれている。

以上が、康有為が描く大同世界における天民たちの弔いの形、いわば天民にとつての葬送文化ということだろう。

時は変わって一九三六年一〇月二二日の夕暮れ時の上海。「コロンビア路から虹橋路へと、ジグザグな行列が、口々に何かを唱えながら流れていた。黄ばんだポプラの葉の向こうにも、はるかに行列が続いているのが見える。大きな白い幡が、数人の若い人に支えられながら進んでゆく」。「狂った国民党の弾圧に散り去った同志を見ながら、一人節を変えない魯迅」を送る葬列は、校舎の窓から眺めていた東亜同文書院の学生に様々な感慨を抱かせた。

魯迅の死から十年ほどが過ぎた一九四六年一月。蔣介石の凱旋帰還を前にした南京では、鉄筋コンクリートで頑丈に固められた汪兆銘の墓が破壊され、暴かれている。「同生共死」を掲げて日本と提携した漢奸に対する断固たる報復だろう。

さらに時代が下って一九五六年四月。北京の中海海懷仁堂における中央工作会議が休憩に入った頃、毛沢東の目の前に、冒頭に「人は生から死に至る。これが自然の定めである。人の死後、それ相應に処置し、妥当な形式によって葬儀を執り行い、哀惜の念を託す。これが人の常なる情だ」と書かれた文書が差し込まれる。それは、死者を安らかに葬ることは人を尊重することに繋がる、だが限りある

土地や資源を考えれば、これまで中国で一般的に行われてきた土葬の習慣を火葬に改めるべきだと訴え、中央工作会議に参加した国家の指導幹部に対し、火葬賛成の署名を募るものだった。

まず筆を持って毛沢東が署名する。その筆は朱徳、彭徳懷、康生、劉少奇へと渡り、以下、周恩來、彭真、董必武、鄧小平など総勢で一五五人が署名している。そこには譚震林、楊尚昆、陶铸、賀龍、胡耀邦、陳伯達、羅瑞卿、李先念、葉劍英などの名前もみえる。そのなかの一人が署名を終えた後に「炉の中で焼かれると、痛いかなあ」と呟くと、一同から笑いが起こったという。毛沢東の指導の下、一五五人の誰もが一致団結して社会主義社会建設に邁進していた頃のことだった。

やがて大躍進政策から文化大革命を経て改革開放の時代へと激動を繰り返す。激しい権力争い、路線闘争の過程で、勝者と敗者とが生まれ、敗者は権力の座から追われる。一五五人の全員が勝者のまま人生を終えたわけではない。

火葬賛成に最初に署名した毛沢東は火葬されることなく、永久保存処置をされている。誰に看取られることなくこの世を去ったといわれる劉少奇などは、悲劇の最たる例だろう。一五五人の誰彼が、いったい、どのような形で弔われたのか。そこから、その時々の権力構造の在りようが

浮かび上がってくる。

生前から「人は死んだ後、なぜに骨や灰を保存しておくのか。大地に撒いて肥料にするもよし、海や河川に流して魚の餌にするもよし」と語っていた周恩來の遺志に従い、彼の遺灰は鄧穎超夫人の手で黄海上空に撒かれた。その死から四カ月ほどが過ぎた一九七六年四月の清明節、周恩來の死を悼む人々の心の叫びは四人組への怨嗟の噴出であり、一時は権勢を恣にしていた四人組の失脚への序曲だった。

毛沢東の葬儀を主宰した華国鋒が後継者となり、やがて四人組は毛沢東の葬儀の公式記録からも消し去られた。胡耀邦の不幸な死を弔う若者は天安門広場に集い、やがて激しい民主化運動に向かった。改革開放を進めた鄧小平は、一九五六年四月の署名の通りに火葬され、その灰は大空から広大な大地に撒かれた。

そして対外開放から三十数年が過ぎたいま、中国各地からは異常なまでに贅を尽くした葬送の例が数多く伝えられる。旧中国における「孝」の理想が復活したのかどうかは定かではないが、少なくとも「厚く葬る」ことを可能にする金銭的余裕が生まれたことだけは確かだろう。

その一方で、毛沢東が掲げた平等社会をあざ笑うかのような格差社会が生まれている。一説には、全人口の1%に国全体の富の三分の一が集中しているとも。都市と農村、

権力を持つ者と持たざる者の間には越え難い懸崖が横たわる。農村幹部の横暴に苦しみ自殺した農民の遺体を抗議のために郷政府に担ぎ込むといった、かつて福建などでみられた「軽生図頼」「架命図頼」を思わせる例すら報告されているほどだ。

——人は「人の死」をどう考え、どのように弔い、なにを託し、どんな念いで葬送を営んで来たのか。

本特集は、葬送に投影された時代情況、政治、思想、社会などの諸相を読み解こうとする試みである。

参考文献

- 康有為『大同書』陳得媛・李伝印標注、華夏出版社、二〇〇二年／李昌平『我向総理説実話』光明日報出版社、二〇〇二年／樹軍編『京城喪事』（話説北京城叢書）九州図書出版社、一九九七年／大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史——創立八十年記念誌』非売品、社団法人滬友会、一九八二年

(樋泉克夫)